2021 年度入学式　式辞

神戸松蔭女子学院大学
学長　待田昌二

皆さん入学おめでとうございます。神戸松蔭女子学院大学の教職員を代表して、心よりお祝い申し上げます。今回は、入学生のみ参加ということで、ご家族の皆様には来校をご遠慮いただきました。たいへん申し訳なく思いますが、ご理解いただくようなにとぞお願いいたします。映像を通してではありますが、ご家族の皆様にたいしましても祝意をお伝えいたします。

本学の入学式ですが、すでにお分かりのようにキリスト教の礼拝形式で行っています。本学の歴史は、今から 129 年前の明治時代中頃に、イギリス人宣教師が設立した松蔭女学校にさかのぼります。今も我々は、入学式や卒業式といった行事を礼拝形式で行っています。また、キリスト教について学ぶ授業もあります。当然ですが、キリスト教の信仰を強制するものではありません。キリスト教の形式に慣れない人は、外国の文化を体験するような、新鮮な気持ちで好奇心を持って経験してもらえればと思います。これからしばらくの間、神戸松蔭という文化の中で過ごすことになったわけですから、入学式だけでなく、礼拝やクリスマス行事を体験してみてください。

先ほど、本学は 129 年前の松蔭女学校から出発したと言いましたが、その歴史の中で中学・高等学校になり、次いで短期大学や四年制大学を創設しました。現在は学校法人松蔭女子学院が松蔭中学・高等学校と本学を運営するという形になっています。

その松蔭女子学院のモットーを紹介したいと思います。それは、「一粒のからし種」です。からしの種が一粒ということです。なぜ、からし、なぜ、一粒の種、と思った人も多いでしょう。聖書にあるイエス・キリストの言葉に由来しています。

「神の国を何にたとえようか。どのようなたとえで示そうか。それは、からし種のようなものである。土に蒔くときには、地上のどんな種よりも小さいが、蒔くと、成長してどんな野菜よりも大きくなり、葉の陰に空の鳥が巣を作れるほど大きな枝を張る」

（マルコによる福音書　4 章　30 - 32 節）

すなわち、小さな種でも、姿かたちを変えながら成長し、やがて鳥が枝に巣を作るほどの木になるという意味です。日本のからしは、木というより草で、鳥が巣を作るほどの大きさには成長しません。イエス・キリストの時代は二千年ほど前ですし、場所は中東地域ですから、別の種類の植物を指していると思われます。いずれにしても、一粒のからし種という言葉は、大きく成長する可能性を持つ小さな種を表しています。

大学モットーは、その小さな種が大きく成長することを期待して　”Open Yourself, Open Your Future” としています。Open Yourself は、自分を解放すること、Open Your Future は

自分の未来を開くことです。すなわち、学生の皆さんが、無意識のうちに自身を閉じ込めてきた殻を破って自分を解放し、心を開いて成長し、卒業後の未来を切り拓いていくことを期待するとともに、私たち教職員が皆さんの成長の手助けをすることを示しています。

皆さんにはのびのびと成長してほしいのですが、のびのびとはいかない、制限がある状況となっています。今日してもらったように、新型コロナウイルスの感染防止対策として、毎日の健康チェック、マスク着用、施設利用時の手指消毒をこれらからも最低限行ってください。

授業は、基本的に教室での授業、いわゆる対面授業で行います。ただ、一部授業は遠隔授業、いわゆるオンラインでの授業になりますので、インターネットにつながったパソコンやタブレットで受講してもらう必要があります。また、対面授業の場合でも、授業資料、予習・復習に関する情報はネット経由で利用する学習支援システムに掲載されます。これからの大学での学びには、ネットの利用が不可欠です。

インターネットでの情報は文字も画像も数字に置き換えられた形、すなわちデジタル信号でやり取りされていますので、ネット経由での情報のやり取りと、情報をすべてデジタル信号で保存・利用することをデジタル化などと呼びます。政府にもデジタル庁が作られ、様々な行政サービスのデジタル化を進めるとしています。もっとも、今やほとんどの情報はデジタル化されていますから、デジタル化ということと情報化ということにそれほど大きな違いはありません。すでに進行していたことが、新型コロナウイルス感染症によってスピードが一気に速まったということです。

皆さんには、大学にいる間にデジタル化、情報化に対応する能力をしっかり身につけてほしいと思います。本学では、すべての学生が卒業時に「情報を主体的、批判的に把握し、利用できるようになる」「情報技術を理解し、主体的に活用できる」ようになってもらいたいと考えています。

皆さんは、物心ついたときからパソコンや携帯電話といったデジタル機器があり、インターネットがあたり前に利用されている社会で育った、いわゆるデジタルネイティブです。スマホも必要不可欠な道具として使いこなしていることでしょう。では、スマホのニュースや商品情報を主体的、批判的に把握できているでしょうか、スマホのアプリを指示されるままではなく主体的に利用できているでしょうか。

Web サイトは基本的に、自らクリックしてあるいはタッチして情報を取りに行きます。テレビや新聞などの従来のマス・メディアでは情報が一方的に与えられるのに比べて、自ら情報を取りに行っているという意味でより主体的であるように思えます。しかし、そうでしょうか。

皆さんは、食べたいと思うものだけを食べているでしょうか。中には、食べたいものだけを食べているという人もいるかもしれません。しかし、そういった人に対して、自分の意志で主

体的に食事をしていると褒めることはありません。それは、食べたいものだけを食べていると、食べすぎたり栄養のバランスが悪くなったりするからです。食べたいと思うのは、たまたま見かけた美味しそうなものやＣＭなどの宣伝といった誘惑に負けてしまった場合もあるからです。目先の欲望に左右されずに栄養のバランスを考えて食事をしている人の方が、主体的に食事をしていると言えるでしょう。

情報に関しても同じです。見たいと思う情報だけを見ていると偏食になってしまいます。また、見たくなること自体が主体性というより誘導された結果という場合もあります。Web サイトや、Web サイトを表示するアプリは、私たちがどんな情報を見ているのかを記録して利用しています。私たちが情報を見ている場所や閲覧履歴を分析して、関心を持ちそうな情報、買ってくれそうな商品を表示します。以前は、単純な分析だったので、的外れな時もあると感じていましたが、AI すなわち人工知能によって、これまでの多くの人の利用状況・閲覧状況を分析して、今ネットを見ている人の関心を予想する能力が高まっています。

私たち人間は、自分の好みに一致した情報、自分の考え方と一致した情報を見ている方が快適です。あなたが好きなタレントをけなしている情報よりも、褒めている情報を見る方が快適です。そういった情報をクリックして見ていると、似た情報がたくさん表示されていきます。関心がある情報、好きな情報を見ているだけでは、情報を主体的、批判的に把握し、利用できるようにはなれません。

しかも、ネットには膨大な情報があり、その中には信頼性の低い情報、嘘の情報も溢れています。情報を批判的に把握するというのは、信頼性の低い情報を見抜く力を付けることです。しかし、それは簡単なことではありません。

どうすればよいか私が皆さんにお伝えしましょう。それは、ある分野を一度きちんと学んでみることです。大学では、幅広い知識とともにそれぞれの学科の学問分野を深く学びます。学問とは情報の積み重ねです。アインシュタインの相対性理論といったように、ある一人の天才の名前が付いていることがありますが、実際には、多くの人たちがその理論の正しさを地道な実験などで証明した結果です。学問は、多くの人が地道な研究を積み重ねて、信頼性の高い情報を残していったものです。もちろん、100%正しいとは限りませんが、まともな学問分野なら、常に多くの人が情報の信頼性を高める努力をしています。

大学で学ぶ学問は、社会に出たときに役に立たないと思っている人が多いかもしれません。しかし、ある学問を学ぶことは、情報の信頼性を高めるためには地道な努力が必要なことを学ぶことであり、そうやって蓄積された知識を学ぶとともに、信頼できる知識を探す方法を学ぶことです。それは、この情報社会の中でもっとも必要とされることです。専門分野をしっかり学ぶことで、信頼できる情報を見極めるセンスが養われます。皆さんが入学した学科の学びに、ぜひ積極的に取り組んでください。